

今年の課題

草野淑子

新年を迎えてこと新しく本年の課題はと考えてみるわけのものでもないけれども、目ざましく躍進しているとみえる幼稚園教育にももろもろの問題が山積しているので、新しい年を迎えることにおたがいの課題意識を強めて、解決への努力をおしまぬ決意も必要であろうかとも思い、すでにわかりきったようなことであるが、私の立場なりに考えていることを書いてみることにした。

○指導書が出たけれど

「幼稚園は花園、先生は園丁」と倉橋先生は『幼稚園雑草』のなかでおっしゃっているが、園丁が花園を管理するための知識や技術はむずかしい。幼稚園の先生がたはそれらを学ぶために何を与えられているであろうか。もちろん戦後の幼稚園教育を支える二本の柱として「幼稚園教育要領」と「幼稚園設置基準」とは公布

されたし、心理学、教育学などの専門の立場からの研究も進んでおり、先生がた自身の熱心な実験研究も盛んではあるけれど、日々の実際指導になると、具体的にまた体系的に示されたものは数少なく、よりどころとなるものもなく、やはり過去の経験にてらし、現在の子どもの姿をとらえ、先輩の歩んだ足あとを手さぐり足さぐりにたどっていくかに見られるのである。

昨年幼稚園教育指導書「絵画製作編」につづいて「言語編」が刊行された。手引書も教科書もまたない幼稚園教師にとって、まさに暗夜に光明を得た感じであつたろうと思われる。「言語編」のごときは発刊されてもしばらくはなかなか地方では手に入れにくかったのも先生がたがいかにこの種のものを渴望していたかということなのであろう。ひきつづき「自然編」も着手されていると聞く。一日も早く全体にわたっての指導書が完成されることを切

望するものであるが、こうしたものに対する受けとめかたはさまざまである。無批判にうのみに受け入れていくと、総合的な子ども生活の実態から離れようとしたり、また指導技術の研究には熱心になるが、子どもの経験を育てるための教材そのものの研究が不足しがちになるのではあるまいか。さらに批判的を受け入れようとする立場をとる場合には子どもの実態に即していいながら、子どもの自然発生的なものに流されやすく、よりよい指導法の研究に欠けたり、過去の経験にのみ頼りがちになるのではなからうか。つねに幼児ひとりびひとりを見つめつつ、しかも毎日の生活の展開を「何を」「どう経験させるか」と考えながら歩まれるものでありたい。そのためによりどころとして、ことしはこの指導書を生かして使っていきたいものである。

○幼児教育にも機会均等を

「幼稚園設置基準」の実施を来年にひかえており、このための文部省の実態調査も昨年実施された。おそらく完全実施にはほど遠いものが多いのではないだろうか。学校教育に仲間入りしたとはいいが、その重要性がまだ認められにくいのか、また努力が足りないのか、どうも「まま子的存在」でしかない。小学校の学級減による教室のあきをあてにするとしても、小学校の方もじゅうぶんとはいえず特に、新教育課程によれば特別教室の整備は当然

考えられねばならず、なかなか幼稚園の施設へというゆとりをもっているところは少ないし、また中学校の学級増や技術家庭科の新設による設備充実といったこともあって、市町村も幼稚園の整備や新設は国庫補助金の増額でもない限り望み薄のようである。従来幼稚園は都会地に偏在しがちであったが、へき地ほど、複式教育の実施されているところほど、就学前教育が要望されてきている。義務教育ではへき地教育や特殊教育など教育の機会均等の施策は着々と進められている。「三つ子の魂百まで」が真理ならば、複雑な社会環境やめんどうな家庭環境からいたいたけな幼な子の魂を守ってやりたいし、それには一部の幼児だけでなく、すべての幼児が同じように機会を与えられるようになってほしいものである。制度上行政上の問題はどうすることもできないことであるが、国として打つ手は考えられないものであろうか。設置基準の完全実施を明年にひかえて、こんなことにも思いをはせ、いっそう真剣に考えてみたい年ではある。

○小学校は幼稚園との連関を考えて

「幼稚園は何をしているのかわからない。」「小学校の先生には理解してもらえない。」と相互の言い分はいつまでもかわらず、幼稚園小学校の連関問題はなかなか順調に運ばないようである。ことは小学校新教育課程の完全実施の年になっており、戦後の学校

教育に大転換を画する重要な時期にあたっているわけである。新指導要領には随所に「幼稚園との関連を考えて……」の字句が見うけられる。こういう時こそ小学校の先生がたに幼稚園教育に耳を傾けてもらうに絶好の機会ではないかと考えられる。就学前教育の適正化がはかられてこそ一年生の出発が順調になることを、真の幼稚園教育の実施があつてこそ学習の生活へ入りやすいことを、小学校側こそこのことに気づいて幼稚園教育の必要性を力説しなければならぬことなのである。幼稚園教育の必要性も小学校の先生に認められてこそ、いっそうその価値が大きくとりあげられるであろう。理解しようと努力しない小学校側にももちろん一面の非はあると考えられるが、幼稚園が特殊性を強調するのあまり、独善的になつてわかつてもらおうとする努力や実践に欠けているとか、また必要性を認められないような幼稚園もあつたりして（言はずとも知れないが）意志が通じあえないということもあるのではなからうか。同じ子どもの発達の一時期をはずかるもの同志、一番理解しやすい立場のものであるはずなのになぜうまくいきにくいかを反省しあいたいものである。おたがいに歩みより、手をつなぎあえるための努力を小学校指導要領の研究を通して高めたものである。

○職場の合理化を

幼稚園の先生がたの仕事は幼ない子どもたちとの生活であること、また女性の多い世界であること、世帯が小さいことなどから、他の職場とはちがった一種独特のふんいきをもっている。なかやかで家庭的であるとともに、愛情にあふれた社会であるとも見えるのであるが、一般社会では事務能率の向上とか生活の合理化とかは普通の常識となつており、家庭の主婦でさえも日常の家事労働の合理化、能率化を考える時代となつてきているとき、こうした現代の社会感覚からは一歩ずれを持った生活が感じられるのである。私の地方だけのこともかもしれないが、非合理的、非能率的なこともあまりふしぎとされず、またしかたがないこととして、ただひたすらに子どものために捧げる姿こそ尊いとされ、そのことのために精力を消耗しつつし、研究する時間的なゆとりも、精神的なうるおいも失つてしまふことにすらなりかねないことが多い。「なぜこうするのか。」「これはどういうことだろう。」「この仕事はどう処理するとよいか。」などつねに考え、生活の合理化を考えてみたい。くる年もくる年も貴重な経験をくりかえしているのであるけれど、ただ無意味にくりかえす経験はつみ重ねたという以外に意義をもたない。みずからの経験のもつ価値を自分でたしかめつつ、一歩一歩たしかな足どりで歩む経験こそ必要ではないか。ことは合理的な生活の処理をしたつみあげをすることに心がけてみたいものである。（岡山県教育庁指導主事）